

〔法学新報〕第十四卷十二（一六六）号

明治三十七年十一月十日

東京法学院大学記事

○講談会 過る十月十四日午後二時より構内大講堂に於て開
会し学長菊池法学博士「法律学風の変遷」なる一場の講演あり
次に法学博士松波仁一郎氏「国際法理の転機」なる題を掲げて
我邦法学者の責任を喝破し終に文学博士三上參次氏は「歴史研
究の一端」なる題の下に元寇の際に於ける古文書の断片に依り
て当時は前後数十年間警戒に警戒を加へて外寇に備へたる拳国

一致の状態を述へ忽必烈は神風に其艦船を粉砕せられざるも北
条時宗に撃退せられたるへきことを断定せられ現時に於ける我
国民も其久しきに耐へて屈せざること当に斯の如くなるへく亦
斯くあらざるへからざることを戒告せられ且つ歴史攻究の趣味
を事例に就き説示して降壇せられ散会を告げたるは六時過ぎな
りし

○研究科 本月より既設研究科を拡張し毎日の授業少くも二
時間を下らざることとし穂積、富井、土方の三博士、伊藤、馬
場、横田の三学士は民法、商法は岡野博士松本学士内田学士
（海商）、民事訴訟法は仁井田博士、伊藤、松岡の二学士、刑法
及び刑事訴訟法は岡田博士、棚橋、豊島、谷野の三学士、憲法
及び行政法は穂積、美濃部の二博士、上杉学士、国際法は高橋、
中村、山田の三博士、経済及び財政は金井松崎の二博士、小林、
山崎の二学士等なり

○語学会 新学年開始以来熟議したる本学語学会は愈々来る
十二月四日（第一日曜日）午前八時より開会に決し本科、専門
科、予科合同の会合なれば各科共準備怠りなきを以て其成績の
大に観るべきものあるは疑なき所にして殊に当日は外人及び講
師諸氏の邦語外国語の演説ある筈なれば其盛況は次号に詳記す
へし